

# 看護職における二次的外傷性ストレス尺度の開発 —予備調査による試作版；二次的外傷性ストレス尺度の検討—

キーワード：看護職、二次的外傷性ストレス、尺度構成、項目分析、内的整合性

○和田由紀子  
新潟青陵大学

## I. 目的

看護職への予備調査を通じ、試作版作成に向けて二次的外傷性ストレス尺度の尺度構成を検討する。

## II. 研究方法

### 1. 対象

A県内3か所の総合病院に勤務する看護職556名。

### 2. 調査期間

2011年3月～4月。

### 3. 調査方法

各施設の看護部を通じた託送調査法による無記名・自記式の質問紙調査。

### 4. 質問紙の内容

基本的属性についての質問の他に、9種類の精神的健康やストレス状況を測定する尺度・質問を主な内容とした。本稿では、その中の25項目からなる予備調査版；二次的外傷性ストレス尺度（以下、予備版とする）について検討した。

予備版は、The Secondary Traumatic Stress Scale<sup>1)</sup>を日本語訳したものをベースに、DSM-IV<sup>2)</sup>・飛鳥井<sup>3)</sup>を参考に作成し、「1=全くない」から「5=非常に良くある」の5段階での回答とした。

### 5. 分析方法

項目分析（天井効果・床効果、主因子法・Promax回転による因子分析）を行った後、内的整合性の検討として信頼性分析、全体および上下27%を基準とした低得点群・高得点群間のt検定（ $p < .05$ ）、相互相関（ $p < .01, .05$ ）を検討した。

### 6. 倫理的配慮

本研究では、使用した尺度の作成者・販売元に使用許可を得、所属機関の倫理審査委員会の承認を得た後に実施した。対象には、個人のプライバシーや協力に対する自由を保障し、研究の主旨と共にその旨を書面で説明した。質問紙は個別に封筒に入れて配布・回収し、回答をもって調査協力への同意を得たものとした。

## III. 結果

質問紙の回収数414（回収率74.5%）、有効回答数338（有効回答率60.8%）であった。対象の職種は准看護師5.3%、看護師85.2%、助産師9.5%、看護職としての平均経験年数は12.1年（SD=9.1）であった。

### 1. 項目分析による検討

予備版の各質問項目は天井効果はみられなかったが、14項目に床効果がみられた。14項目の中で、歪度・尖度の高かった5項目を以降の分析から除外した。

次に、残りの20項目に対して因子分析を行ったところ、各因子の固有値の変化や因子行列から3因子構造が考えられた。因子1は不安・活動性の低下に関して高い因子負荷量を示す8項目、因子2は覚醒亢進または減退に関して高い因子負荷量を示す7項目、因子3は意欲の低下と回避に関して高い因子負荷量を示す5項目で構成された。3因子で全分散を説明する割合は63.9%であった。

## 2. 内的整合性の検討

1の結果をもとに、各因子を構成する質問項目を下位尺度として平均値を算出し、信頼性分析を行った。 $\alpha$ 係数は因子1（ $m=2.2, v=.03$ ）が.92、因子2（ $m=2.0, v=.02$ ）が.89、因子3（ $m=2.2, v=.11$ ）が.85といずれも高い値を示し、項目間の相関行列・項目合計統計量にも問題はなかった。20項目の合計点による低得点群（ $m=24.5, SD=3.7$ ）・高得点群（ $m=63.3, SD=7.6$ ）の間で、20項目合計点・下位尺度平均値のt検定を行ったところ、全てにおいて高得点群が有意に高かった。

更に、20項目合計点および各下位尺度平均値について、全体と低得点群・高得点群別で相互相関を検討した。全体では20項目合計点および各下位尺度でそれぞれ $r=.68 \sim .94$ と有意な強い正の相関がみられた。低得点群・高得点群別ではそれぞれ、20項目合計点と各下位尺度間で $r=.60 \sim .70$ の有意な強い正の相関がみられ、因子1・因子3の下位尺度間では $r=.24 \sim .29$ の有意な弱い正の相関がみられた。低得点群・高得点群別の相互相関結果は非常に類似していた。

## IV. 考察

本研究は初回予備調査であったため、使用した予備版の質問項目を取捨するのに余地を持たせ、各因子にラベル付けをしなかった。始めの項目分析で除外しなかった9項目は当然であるが、全体の尺度構成や信頼性・妥当性について今後も分析を行い、試作版作成に向け今後も改善していかなければならない。本稿で質問項目を20にした後の因子分析・内的整合性の検討結果については、大きな問題はみられない。しかし、低得点群・高得点群別でそれぞれ第1因子と第3因子でのみ弱い正の相関がみられたことについては、他の分析も加えて更に検討する必要がある。

## V. 結論

本稿で行った予備版の分析は一定の方向性が得られたが、試作版作成に向け、全体の尺度構成や信頼性・妥当性について今後も検討していく必要がある。

本研究は平成22年度科学研究費補助金（挑戦的萌芽研究、課題番号22653084）による研究の一部である。

## 引用文献

1. Bride, Robinson et.al, Development and Validation of The Secondary Traumatic Stress Scale. Research on social work practice. 2004;14(1):27-35.
2. 高橋三郎・大野裕他訳. DSM-IV精神疾患の分類と診断の手引き. 179—182. 東京都:医学書院;2003.
3. 飛鳥井望. IES-R (改訂出来事インパクト尺度). 金吉春 (編) 心的トラウマの理解とケア第2版. 312—313. 東京都:じほう;2006.